

『ラテンアメリカ文学入門』

ーボルヘス、ガルシア・マルケスから新世代の旗手まで』

寺尾 隆吉 中央公論新社 (中公新書)

2016年10月 226頁 780円+税 ISBN978-4-12-102404-6

マリオ・バルガス・ジョサの『水を得た魚』(水声社 2016年)、ホセ・ドノソ『別荘』(現代企画室 14年)、カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』(現代企画室 12年)など訳書も多数出している、ラテンアメリカ文学研究者(現在はフェリス女学院大学教授)によるラテンアメリカ文学の概説書。本書はその最盛期ともいべき1958～81年とその前後数十年の現代ラテンアメリカ文学を中心に、具体的な作品に即して19世紀前半の独立以来約100年にわたる流れを明解に解説しており、この1冊でラテンアメリカ文学の全体的な歴史の流れと主要作品の要点を知ることができる。

19世紀初頭のまだラテンアメリカでは文学が低く見られていた時代から説き起こし、徐々にラテンアメリカ小説が欧州に進出して評価を受け始め、1958年にメキシコで出版された『澄みわたる大地』をきっかけに60～70年代に世界的にも旋風を巻き起こし、67年のガルシア・マルケスの『百年の孤独』大成功によって、ラテンアメリカ文学は世界の文学の最先端と評価されブームの絶頂期を迎えた。ブームの終息が顕著になり始めた70年代末からは、チリのイサベル・アジェンデの『精霊たちの家』のように、難解さを強めていた文学ではなく娯楽小説を求めていた読者に受け入れられた如く、読者層の移り変わりが新たなベストセラーを生む時代に移ってきた。しかし、出版社の増加と文学賞の乱立で作家デビューはたやすくなっても、その後も高い芸術性と商業性を維持するのが難しくなり、作品が量産されている中で質の高い小説を鑑識眼の高い読者・評論家が支えたブームの時代の再来は無理にしても、数年に一作というペースであれラテンアメリカ文学から読み応えのある小説が生みだされることに期待をかける理由はないと結んでいる。

日本ではラテンアメリカ文学はスペイン語圏のものを指すことが多く、ほとんどの場合ブラジル文学は対象に入っていないが、本書でもマシャードの代表的な作品3点とブラジル色は薄いコエーリョについて簡単に言及しているだけである。(桜井 敏浩)



『キューバ革命 1953～1959年』

ーモンカダ兵営攻撃から革命の勝利へ』

河合 恒生 有志舎

2016年7月 394頁 2,800円+税 ISBN978-4-908672-04-0

フィデル・カストロが組織した武装グループによる1953年7月26日のモンカダ兵営襲撃は無残にも失敗し、生き残った首謀者は裁判を受けピノス島の刑務所に収監されたが、恩赦によって55年に釈放されると間もなく「7月26日運動」と名付けた武装闘争を開始した。56年12月にメキシコからグランマ号に乗ってキューバに上陸し、東部のシエラ・マエストラ山中に立て籠もってゲリラ戦を拡大し、1959年1月1日の独裁者バチスタ大統領の逃亡、革命軍の首都ハバナ入城をもってキューバ革命は勝利をつかんだ。

本書は、この間の革命運動の過程を詳細に記述するとともに、1940年代のキューバ政治の腐敗に端を発し、バチスタの独裁を生むに至った50年代前半の革命の背景となる歴史、フィデルの大学時代についても概説している。(桜井 敏浩)



パラグアイ共和国

República del Paraguay

百聞は一見に如かず、
映画で知るパラグアイ

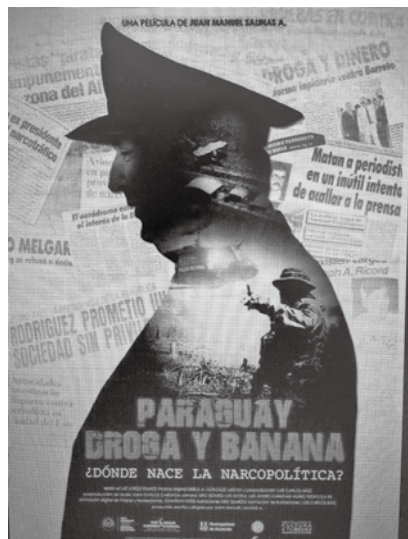
硯田 一弘

日本の映画界では邦画が洋画を圧倒しているようですが、南米の中の小国であるパラグアイでも国産の映画が人気を博し始めています。

パラグアイの一般現状については、本誌2016/17年冬号の「ラテンアメリカ随想」で上田善久在パラグアイ大使が詳細なご説明をされているので、本稿では最近パラグアイで公開された国産映画を絡めて生活感を中心にご紹介します。

「パラグアイ、麻薬とバナナ」

(原題: Paraguay, Droga y Banana)



あらためて地図で確認するまでもなく、パラグアイは南米大陸の中心に位置するために、いわゆる「海外」へのアクセスが不便な国と言えま

す。面積はブラジルの20分の1(日本より少し大きい41万平方km)、人口はブラジルの30分の1の685万人、一人当たりGDPは僅か4,000ドル強でブラジルの約4分の1。

しかし、最近の首都アスンシオン市内にはこれまで見られなかった高層ビル(と言っても精々20階建てですが)が林立し始め、南米最大の大都市サンパウロと比べても遜色の無い大型ショッピングセンターが相次いで開業しています。生活してみて判ったことは、サンパウロ並みに生活物資が豊富なこと。数字だけで観ればブラジルの地方都市レベルのアスンシオンは、南米各国の主要都市と比べても遜色の無い豊かさであると同時に、一人当たりGDPの数値で判る通り、物価が比較的安いので、非常に暮らし易いのです。

何故、不便な内陸国で豊富な物資が調達できているのか?を説明するのが、このドキュメンタリー映画です。

パラグアイは1954年から89年までの35年間にわたって、大の親日家でもあったStroessner大統領の独裁下にありました。独裁と言うイメージは良くないのですが、パラグアイ発展の基礎が形成された時期でもあり、これはベネズエラで1945年から9年間続いたヒメネス政権時代と同様、歴史上の判断の

分かれるところですが、いずれにしても、第二次大戦から朝鮮・ベトナムと次々戦争が発生した時期に、ラテンアメリカ(中南米)でも59年のキューバ革命に始まった反米・共産主義の波がブラジル、アルゼンチン、ペルー、チリを襲い、米国は裏庭をソ連主導の共産主義に乗っ取られる危機に瀕しました。

そこで、親米独裁のStroessner政権を抱き込み、共産=モノ不足の周辺国に対してタバコや酒等の嗜好品を大量に送り込んで、左翼化した周辺国を思想的に資本主義に寝返らせるための物資の供給基地として、パラグアイが利用されたようです。

Stroessner将軍が腹心のRodriguez将軍のクーデターによって追放された後も、米国式資本主義を守る橋頭堡として、パラグアイは豊富な物資の支給を約束されている訳で、映画はそうした直近の歴史を淡々と紹介しています。

残念ながら、パラグアイが麻薬や武器類の密輸のハブになっているであろうことは、事実のようで、ブラジル大都市の貧民窟Favelaで流通する重火器の多くはパラグアイ・ブラジル国境周辺から持ち出されているそうです。その割りにパラグアイ国内の治安が周辺諸国と比べ安定しているのは、

やはり所得が少ないので武器を所有する経済力が無いから、とも言えます。

「誘拐」(原題: El Secuestro)



こうした事情は、別のこの映画でも娯楽要素半分で紹介されました。

のっけから密輸だ、武器だ、麻薬だと、危ないイメージで始まりましたが、次にパラグアイの豊かな文化的要素についてもご紹介し、汚名返上を図りましょう。

「グアラニ」(原題: Guarani)



パラグアイの人口685万人のおよそ8割が、ヨーロッパ人種と現地グアラニ人種との混血と言われています。グアラニというのは、16世紀にスペイン・ポルトガル等の欧州諸国が南米を「征服」する以前から南米大陸南部の広範囲に居住していた原住民族で、ブラジルのイピランガとかイピラプエラといった御馴染みの地名も、グアラニ族が使っていた呼称をそのまま引き継いだと言われています。

言語としてのグアラニ語は、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、ボリビアでも一部で使用されており、メルコスール(南米南部共同市場)ではスペイン語と並んで公用語

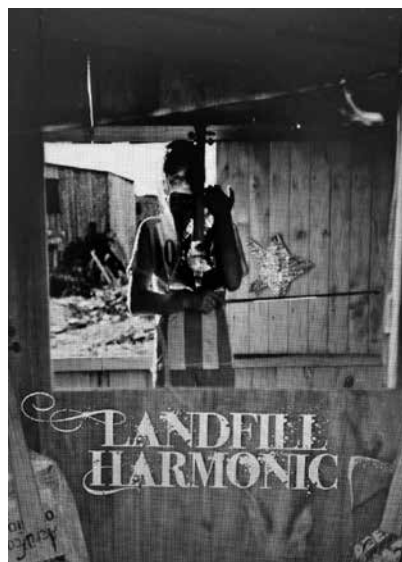
にもなっています。そのグアラニ語が最も広く使われているのがパラグアイで、テレビやラジオでは、日常はスペイン語が使われるものの、混血人種のほとんどがグアラニ語を解し、グアラニ語だけで会話が行われている地域も数多くのこっていますし、ラジオ番組などはいきなりパーソナリティがグアラニ語で話し始めて聞き取り不可能になったりします。

本作は、そうしたグアラニ語地域で、グアラニしか話せない老人と、学校で習ったスペイン語とグアラニ語の両方を解する孫娘のアルゼンチンへの旅の様子を描いたロード・ムービー。貧しい地方村落で、ブエノスアイレスに出稼ぎに行った母親に会いたがっている中学生の孫娘を、船頭である祖父が自分の渡船で連れ出すのですが...

ドキュメンタリー作品と見まごうばかりの二人の名演と、映し出される美しい田園風景は500年以上かけて融合してきた二つの文化の豊かさを感じさせてくれます。

「カテウラ交響楽団」

(原題: La Orquesta de Cateura - Landfill Harmonic)



ベネズエラで1970年代にJose Antonio Abreu博士によって始められたエル・システマ“El Sistema”という、貧困地域の子供達を音楽教育を通じて立派な社会人に育てよう、という運動があり、この中から育ったGustavo Dudamel氏が今年のウィーンフィル・ニューイヤー・コンサートの指揮棒を振るほどの世界的名指揮者(ロサンゼルス交響楽団の音楽監督)になったことから、彼を育てたこの運動は日本でも随分有名になりました。

そのパラグアイ版とも言えるのが、このカテウラ交響楽団、俗称リサイクル楽団です。Cateuraというのはアスンシオン市の南に位置するゴミの集積場のある場所で、周辺には貧しい層の人たちが、集まったゴミの仕分けなどを生業にして暮らしています。

パラグアイでも最も貧しいこのエリアで、廃棄物の缶や壊れた家具の部品等を材料にして楽器を作り、地域の子供達に再生楽器で音楽を奏でる愉しみを教え、物質的に貧しい暮らしを精神的に豊かなモノに変えたのが、指導者Fabio Chavez氏で、この作品はChavez氏が如何にして活動を始め、育ててきたかを紹介するドキュメンタリーです。当初は活動に懐疑的であった親達も、子供達の努力する姿や演奏に勇気付けられてゆく様子や、米国のロックバンドMetallicaのメンバーが活動に共鳴して現地を訪問し、子供達と交流する様子等が紹介されて

おり、まだ有名な音楽家を排出している訳ではないものの、貧困格差社会が世界的な問題になっている今、心の豊かさこそが人生に大切なものであることを教えてくれる一本に仕上がっています。

「稲妻」(原題: Truenos)



パラグアイは他の南米諸国同様、モータースポーツが若者の人気を集めています。Truenosというのは、アスンシオンのレース・サーキットで行われる改造自動車のスピード競争のことで、この作品はメカニクスの若者がスポンサーの酔っ払いドラ息子に代わってレースに参加し、勝ち残ってゆく様子を描いたドラマ。こう筋書きを書くと、もう全部判ってしまうような話ではあるのですが、下町の貧しい若者と富裕家庭のお嬢さんとの恋愛も絡めて、外国人ではなかなか覗くことのできない普通のパラグアイ人の生活が理解できる作品。

最初にご紹介した「誘拐」も、怖そうなタイトルとは裏腹に、ラップ音楽での成功を夢見る左官工の若者が、間違っって人を殺めたことで入れられた刑務所で出会ったマフィアのボスに拾われて一旦仲間になるものの、豊かな家庭の女子高生との恋愛をキッカケに更生を目指すというストーリーで、パラグアイ南部の都市エンカルナシオンの美しい景色とともにハラハラしながらパラグアイの若者の生活や音楽嗜好が理解できる物語になっている、

こうした作品を出来たての素晴らしい映画館で観ることで、すっかりパラグアイ人になりきった気分になれるのは楽しい体験です。

とは言うものの、現在パラグアイには国内全部で13の映画館しかなく、アスンシオン周辺で9館、南部のエンカルナシオン市に2館、東部イグアス近くのエステ市に1館、中央部のカグアス市に1館で、その他の地域の人たちは、最寄の町まで来ないと映画も観られないというのが実態で、これで映画産業を盛り上げようとする人達が居るといふ事実だけでも勇気付けられます。ただ、普段は圧倒的にハリウッド等のメジャー配給作品ばかり上映されていて、同じ言語ということで偶にアルゼンチン製作品が上映されますが、ブラジル映画が掛かっているのは観た事がありません。チリやペルーでも映画は製作されていますが、パラグアイの劇場で上映されることがあるのか?不明です。日本のアニメは当地でも好評を博しており、学校の休みの期間にはジブリ作品などが上映されます。

また、他の南米諸国同様、映画館によって料金体系が違い、曜日によっても違うので、映画を見るなら、熱心な映画ファンは平日の初回か割引日の水曜日に観に行く様です。料金は最新の4DX劇場で55,000グアラニ(Gs. 約1,200円)、一番安いケース水曜やマチネ料金がGs.15,000(300円強)なので、日本に比べれば随分安いのですが、他の中南米諸国と同様、一般庶民にとっては劇場で観る映画は依然高値の花であり、テレビでの放映や道端で売られる海賊版DVDが映画との主な接点になっている事実是否めません。最近出来始めたばか

りの最新劇場での鑑賞が庶民の著作権意識を高めることに寄与することも期待します。

以上、昨年後半から今年にかけて上映された5本の作品とともにパラグアイ映画事情をご紹介しましたが、今のパラグアイを少しでもご理解戴けましたでしょうか?

パラグアイの映画、残念ながら日本では上映もされず、DVDも販売されないでしょうが、ネット経由で作品の一部は観られますから、是非パラグアイ気分になってみて下さい。

ちなみに、Youtubeでは上記の作品名とPelícula Paraguayというキーワードを入力すれば、Trailer Oficial(予告編)のページが出てきます。

(すずりだ かずひろ 三菱商事株式会社
アスンシオン事務所駐在員。在パラグアイ
日本商工会議所会頭)



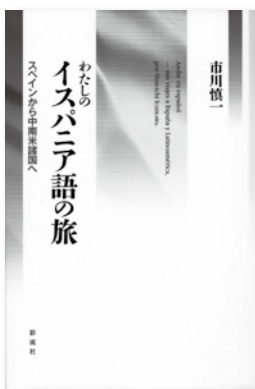
『フンボルトの冒険 – 自然という<生命の網>の発明』

アンドレア・ウルフ 鍛原多恵子訳 NHK 出版
2017年1月 502頁 2,900円+税 ISBN978-4-14-081712-4

南極から南米西岸に沿って北上する寒流はフンボルト海流と呼ばれているが、19世紀にこれを調査したフンボルトは、1769年ナポレオン・ボナパルトと同じ年にプロイセンで生まれ、ともに分野は異なるが当時の欧州に最も影響力を持った有名人と言われた。鉱山技術から地質学、地理学、植物学、さらには物理学まで多岐な知識をもった博物学者として、世界各地の自然を探求した冒険家としてフィールド調査を敢行し、旅行記、地理学評論、奴隷制度批判を含む政治評論、地質学・気候学の論考、晩年その研究成果をまとめた大著『コスモス』に至る幾多の著作を残し、世界の自然科学界に大きな足跡を残しているが、自然界は巨大な一個の生き物で、すべては互いにつながっているとする「生命の網」という彼の自然観の影響は、南米をスペイン植民地統治から解放したシモン・ボリバル、『進化論』を提唱したダーウィンほか学者のみならず政治家やいち早く自然保護活動を提唱したジョン・ミュアなど多岐にわたった。

彼の冒険は、1799年5月にカナリア諸島を経てベネズエラ東部クマナに渡り、カラカスから大平原（リャノス）を横断してオリノコ河をデルタからブラジル国境間近の源地地帯まで周ってコロンビアのボゴタへ赴き、ここからアンデス山脈を越えエクアドルのキト、当時世界一の高山と考えられていた（地球の中心から計れば赤道付近にあるためエベレスト山を凌ぐことには間違いない）チンボラソ山の山頂まで高度差300mを残す5,917m地点まで登攀、南下してペルーのリマに1802年10月に到達したのだが、その間実に多くの観察記録ノート、スケッチ、2,000種が欧州では未知のものだった押し葉標本収集を得た、内容の濃密な大旅行であった。1804年にパリに戻り、以後資料・記録、そしてアイデアを整理して幾つもの学術論文、著作を著すが、再び南北アメリカでフィールド調査をしたいという強い願望は当時の欧州情勢から実現せず、1829年の半年間のシベリア踏査が最後の調査旅行となった。

本書の前半はフンボルトの人生を辿って自然観がどのように形成されたかを明らかにし、後半は、これに共鳴した人々の足跡を追っている。著者は若い頃をドイツで過ごし、英国でデザイン史を学んだ英国在住の作家・歴史家。
(桜井 敏浩)



『わたしのスペイン語の旅 – スペインから中南米諸国へ』

市川 慎一 彩流社
2017年1月 175頁 2,500円+税 ISBN978-4-7791-2276-7

フランス思想・比較文化が専門の早稲田大学名誉教授によるスペイン、メキシコ、キューバ、チリ、アルゼンチン旅行のエッセイ集。はじめにフランス政府給付留学生として渡仏した折りにスペイン人研究者との交流をきっかけに独学でスペイン語を学び、並外れた知識欲と行動力をもってスペイン、南北アメリカ各地を訪れている。

現地調査や学会報告、スペインやメキシコの大学での講義という明確な目的を持ち、興味の対象はスペインに今も居る“ハボン”姓と遣欧使節団、スペイン内戦、支倉常長やフンボルトのメキシコでの足跡、メキシコと日本人画家ルイス・ニシザワ、藤田嗣治とディエゴ・リベラの関係、キューバ見聞、アルゼンチンでの学会発表、さらにはチリの詩人パブロ・ネルーダとスペイン内戦など多岐にわたり、著者の旺盛な探究心がそこかしこに感じさせる。
(桜井 敏浩)